

注 意 報

茨城県病害虫防除所

平成 23 年 5 月 16 日

病害虫発生予察注意報 第 1 号

小麦赤かび病の発生が多くなると予想されます

防除を確実に実施しましょう

[発令の内容]

作物名：小麦
病害虫名：赤かび病
発生量：多い
発生地域：県下全域

[発令の根拠]

5 月に入ってから気温が高く曇雨天の日が多いため、感染を助長する条件が続いている(表 1)。
六条大麦の一部で発病を確認している(写真)。
本年は、出穂が平年並～やや遅れたため、今後も本病に感染しやすい生育ステージにある。



写真 大麦赤かび病の発病穂

表 1 赤かび病の子のう胞子飛散好適条件の出現状況(水戸市)

日付	5月														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
子のう胞子 飛散好適日															

子のう胞子の飛散好適条件(日最低気温 10 以上、日最高気温 15 以上で、湿度 80%以上が降雨日とその翌日)

[防除対策]

表 2 を参考に必ず薬剤散布を行う。開花期から 10 日程度の間が最も感染しやすい時期であるため、小麦赤かび病の防除適期は開花始期～開花期である。開花始期に 1 回目の薬剤散布を行った場合でも、降雨が多い場合は、その 7～10 日後に 2 回目の散布を行う。ただし、薬剤によっては出穂後 1 回しか使用できないものがあるので注意する。薬剤散布後、降雨が予想される場合は、粉剤よりも水和剤(フロアブル剤、ゾル剤を含む)などの方がより高い効果を期待できる。薬剤散布の際は、周辺作物等への飛散(ドリフト)に十分注意する。

[収穫期以降の防除対策]

収穫が遅れると、被害粒から健全粒へと感染が広がる恐れがあるため、適期収穫に努める。また、圃場内で倒伏した部分は多湿条件となり、感染が広がっている恐れがあるため、その部分は刈り分けて処分する。
含水率の高い麦を収穫した場合、袋の中で本菌が蔓延することがあるので、収穫後は時間をおかずに適切な乾燥・調製を行う。
グレーダーによる粒厚選別(2.4mm 以上)等は被害粒の除去に有効である。
被害残渣やイネ科雑草は翌年の伝染源となるので、土壌中にすき込んで腐敗させる。

表2 小麦赤かび病に登録のある主な薬剤（平成23年5月11日現在）

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数 - 本剤の使用回数	有効成分
チルト乳剤25	1,000~2,000倍	3-3	プロピコナゾール
シルバキュアフロアブル	2,000倍	7-2	テブコナゾール
ストロビーフロアブル	2,000~3,000倍	14-3	クレソキシムメチル
トップジンM水和剤	1,000~1,500倍	14-3 (出穂期以降2)	チオファネートメチル
ワークアップフロアブル	2,000倍	14-2	メトコナゾール

注1) 上記の薬剤は、いずれも無人ヘリ散布またはブームスプレーヤーで専用ノズルを用いた高濃度少量散布も可能です。希釈倍数等については、別途確認してください。

注2) 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ、周辺作物への飛散に留意して使用してください。